

序

本書は、奈良文化財研究所が中国社会科学院考古研究所に協力して、1996年から2001年まで実施した、漢長安城桂宮の発掘調査報告書の日本語版です。報告書の中国語版は、中国社会科学院考古研究所の編集により、2007年1月に文物出版社から刊行されております。その後、日本語版の刊行についての了解を得て翻訳に取りかかり、このたび出版の運びとなりました。日本語版の刊行にあたっては、発掘調査の報告である報告編に加え、日中両国の研究者による関連研究をまとめて論考編とし、一書に編むこととしました。

具体的な発掘調査の経過や調査体制については、報告編本文中の劉慶柱前所長と李毓芳氏の序言に詳しく述べられておりますので、そちらをご覧くださいと思います。奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所の共同研究は、1991年に両研究所間で友好共同研究に関する協定を締結して以来、今日まで連綿と続いておりますが、桂宮の発掘調査は、北魏洛陽永寧寺につづく共同発掘の第二弾として実施したものです。

4年間におよぶ桂宮の共同調査では、本書報告編をご覧くださいればおわかりのように、ひじょうに多くの成果が上げられました。漢代の宮殿の配置や建物構造の具体的な様相が解明され、中国における都城研究の進展に大きな役割を果たすものとなっております。それらは同時に、日本の古代都城の変遷を考えるうえでもきわめて重要な資料であることは言を俟ちません。今回、日本語版を提供することで、広く日本の研究者にもご利用いただけることとなったのはまことに喜ばしく、翻訳を快諾された劉慶柱前所長と王巍所長をはじめ、中国社会科学院考古研究所の皆さんに篤く御礼申し上げる次第です。

また、論考編では、桂宮出土の瓦磚を中心に、秦漢代の瓦磚の製作技術やその変遷に関する論考などをまとめています。昨年刊行した『古代東アジアの造瓦技術』（奈良文化財研究所研究報告第3冊）とあわせ、日中および日韓の共同研究の成果のひとつと

して、古代の東アジア、ひいては日本古代の造瓦技術の解明に資するものとなるでしょう。また、こうした研究成果が、同じ遺跡を共同で発掘し、その出土品を調査研究するという、現場に立脚したものである点でも、重要な意義をもつと考えます。

なお、論考編には、桂宮出土品の中でもきわめて重要な発見であった封禪玉牒についての馮時氏の論考も含まれていることを付言しておきます。

本書の報告編ならびに論考編が大方の利用に供され、日本における古代都城研究の進展に寄与できれば、関係者一同これにまさる喜びはありません。

最後に、日本語版の報告書の作成にあたって絶大なご協力をいただいた中国社会科学院考古研究所はもちろん、論考のご寄稿を賜った方々や関係者各位にもあらためて御礼申し上げ、ご挨拶といたします。

2011年3月

独立行政法人国立文化財機構理事
奈良文化財研究所長
田 辺 征 夫